

図180 慶長期の平瓦と各種刻印

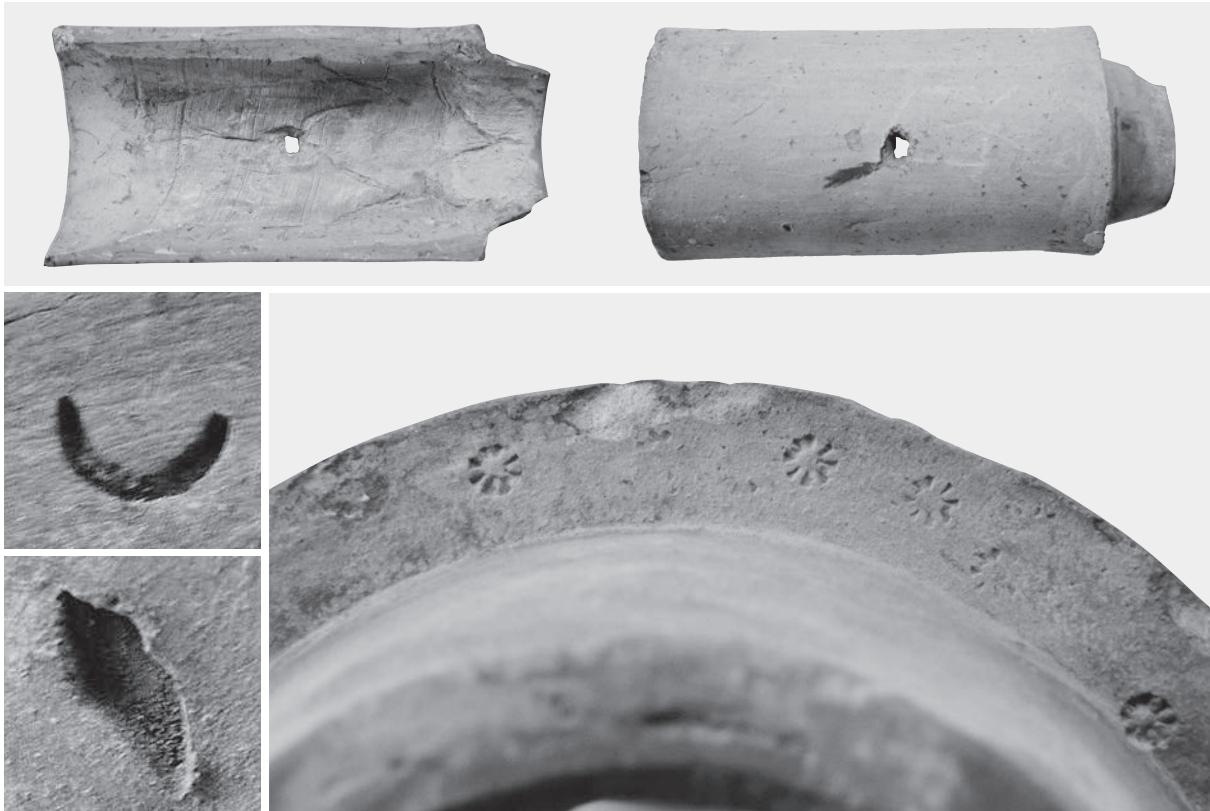


図181 慶長期の丸瓦（紐2段）と各種刻印

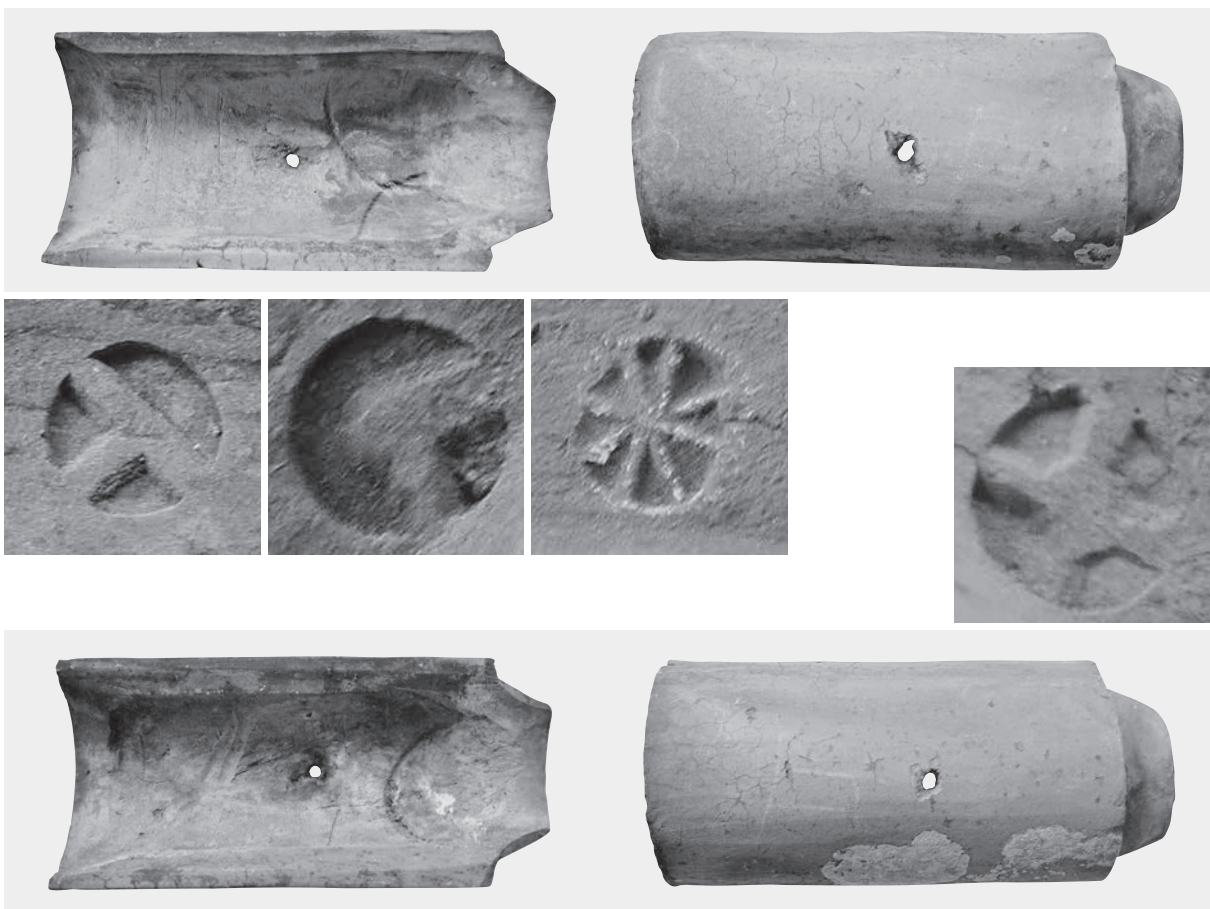


図182 慶長期の丸瓦（紐1段）と各種刻印



图183 元禄六年 各種瓦

括に圏線で囲んだものである。

ハ 平瓦

元禄期の平瓦は、一、二二七枚（平瓦全体の五・四一％）であった。

ニ 丸瓦

元禄期の丸瓦は、三五一本（丸瓦全体の四・九〇％）残存していた。ほぼ全数に元禄六年の年紀と瓦師名の刻印が裏面にされている。吊紐痕があるもの一種類と、吊紐痕のないもの一種類に分類できる。それぞれ刻印の押し方に違いが見られる。表面は篋ナデを施す。裏面は面取し、吊紐痕のあるものに鉄線切の痕が見られ、吊紐痕のないものには鉄線切痕は見られない。

ホ 隅丸瓦

元禄期の瓦としては、隅丸瓦が一本あった。瓦当文様は軒丸瓦と同じで、これにも年紀と瓦師名の刻印が裏面に押されていた。

(七) 天保期

天保六～七年にかけて大がかりな修理が行われた。各種瓦には、元禄期と同様に年紀と瓦師名の刻印を見ることができ、瓦に残された年紀は、篆書体で「天保六年乙未九月日造」、あるいは楷書体で「天保六乙未年」。瓦師名は楷書体で、篆書体の紀年瓦銘には「瓦工平城住人三島三郎兵衛富明」、楷書体の紀年瓦銘には「瓦師三郎兵衛」とある。鬼瓦も一個取り替えられたようである。

イ 軒平瓦

天保期の軒平瓦は、七八枚（軒平瓦全体の二〇・六三％）あった。瓦当文様は一種類で、「東大寺正倉院」の文字を配している。

ロ 軒丸瓦

天保期の軒丸瓦は、六九本（軒丸瓦全体の一八・〇二％）であった。瓦当文様は「東大寺正倉院」の文字を二列に配し、文字の両脇には線刻で昇龍を描いている。

ハ 平瓦

天保期の平瓦は、一、六九二枚（平瓦全体の七・四六％）であった。天保六年の年紀と瓦師名が刻印されていたが、刻印は裏面あるいは表面に刻印されており、年紀の書体も篆書体と楷書体の二種類が見られた。

ニ 丸瓦

天保期の丸瓦は、一、〇三六本（丸瓦全体の一四・四五％）であった。平瓦同様ほぼ全数に年紀と瓦師名の刻印がされており、刻印は、表面あるいは裏面に押しであり、また年紀の書体も楷書体のもものと篆書体のものが見られた。表面は篋ナデを施す。裏面は面取し、吊紐痕はなく、玉縁際に細い角材の叩き痕がみられ、鉄線切の痕が残るものも見られる。

ホ 隅丸瓦

天保期の瓦として、隅丸瓦が三本あった。軒丸瓦と同様の瓦当文様を持ち、篆書体による年紀と楷書体による瓦師名が刻印されているものがあつた。

(八) その他の江戸時代

元禄期、天保期以外に、江戸時代のものと思われる瓦がいくつか見られた。瓦からは江戸時代中後期と見られるが、史料には修理の記録が見られない。軒瓦は、大がかりな修理をしなくとも取り替えられるため、記録に残らない維持管理において修理されたものの可能性もあろう。そのほかは、元禄期や天保期に混じって使われたもの、あるいは、江戸時代前期の寛文期の修理の可能性も考えられる。どれも、数は多くないので、記録以外の部分的な修理が行われた可能性はある。表面は丁寧な篋ナデを施し、裏面も叩き痕や布目をナデ消している。

イ 軒平瓦

江戸時代後期と見られる軒平瓦が、四枚（軒平瓦全体の一・〇六％）存在した。瓦当文様は、一種類で唐草模様を配していた。